

# Glocal Tenri



9

月刊 グローカル天理 Monthly Bulletin Vol.15 No.9 September 2014

天理大学 おやさと研究所 Oyasato Institute for the Study of Religion, Tenri University

## CONTENTS

- ・ 巻頭言  
「お葬式」考  
／深谷忠一 ..... 1
- ・ 天理教教理史断章 (84)  
近愛文書⑤  
／安井幹夫 ..... 2
- ・ 『教祖伝』探究 (3)  
年限の理  
／深谷忠一 ..... 3
- ・ 天理教伝道史の諸相 (33)  
奈良県と兵庫県为天理教  
／早田一郎 ..... 4
- ・ 「おふでさき」天理言語教学試論～「こと」的世界観への未来像～ (5)  
第1章「もの」と「こと」の意味論③  
／井上昭夫 ..... 5
- ・ 「おふでさき」の有機的展開 (29)  
第四号：第六十九首～第百十五首  
／深谷耕治 ..... 6
- ・ 新宗教のブラジル伝道 (17)  
日本の新宗教の組織的展開①  
／山田政信 ..... 7
- ・ 「いのち」をつなぐ一生死の現象 (33)  
「いのち」について④  
／堀内みどり ..... 8
- ・ 東日本大震災と宗教 (3)  
新生「心の相談室」  
／澤井治郎 ..... 9
- ・ ノーマライゼーションへの道程 (31)  
デンマーク事例③  
／八木三郎 ..... 10
- ・ 図書紹介 (85)  
『よくわかる障害学』  
／八木三郎 ..... 12
- ・ English Summary ..... 13
- ・ おやさと研究所ニュース ..... 14  
天理大学で「宗教と社会」学会開催 (堀内みどり) / 天理台湾学会第24回研究大会で発表 (金子昭) / 第272回研究報告会「沖縄の文化と天理教」(山口國三) / 開講20周年記念・公開教学講座」のご案内

## 巻頭言

### 「お葬式」考

おやさと研究所長 深谷忠一 Chuichi Fukaya

葬儀についてネットで検索をしている中で、次のような文章に出会いました。(以下、表現文化社『現代葬儀考』47号、碑文谷創氏の文章より抜粋)

遺族や関係者にとって葬儀で重要なのは、故人と十分な別れをすることである。本来は通夜こそがその時間であるが、近年は平日の昼間よりも夜の弔問が便利ということで通夜に弔問する傾向が増している。

30～40年前に葬儀式と告別式の合体が行われたことにより、葬儀の社会儀礼化が進んだが、今、それがさらに徹底されようとしている。近親者にとっての葬儀という部分が完全に失われようとしていることへの危機感が、今日の「脱葬式」つまりは葬儀の社会性の否定、密葬化を促している大きな要因となっているのは確かである。

過度の社会儀礼化は戒められる必要があるが、密葬化は遺族が恣意的に「関係者」の範囲を設定するために、故人と係わりのあった人々を閉め出し、その人たちが別れを告げる機会を奪いかねない。

この一つの解決策が、今日流行の兆しを見せている「密葬—お別れ会」方式である。死の直後の火葬までの葬りは近親者だけで閉じて行い、後日に故人と関係のあった人々を招いてお別れ会を行う。「お別れ会」とは独立形態の告別式の現代的な表現である。

現状の基本的な葬儀スケジュールは次のようになっている。

死亡当日を第1日目とすると、第1日目の夜に仮通夜、第2日目の夜に本通夜、第3日目の昼前後に葬儀・告別式、それが終了後に火葬、会食—となつ

ている。この本通夜と葬儀・告別式がいわゆる「お葬式」である。

通夜が、近親者による死の受容、死者の弔いの時間であると設定するならば、死亡日の夜および翌日の夜を通夜として、近親者だけで営むようにする。第3日目の夜に関係者を招き告別式を営み、第4日目の朝に再び近親者のみで葬儀式を営み、火葬に付すという方式はどうだろう。

この場合、一般の人々に案内するのは3日目の夜に営まれる告別式だけである。夜であるから時間のある人には軽食や酒・お茶などを振る舞って、故人との関係の話聞く時間を作ってもよいだろう。

死亡直後の衝撃が強い最初の2日間と火葬を控えて精神的な動揺がある第4日目は、あくまで近親者を中心に営むようにすれば、グリーンワークとしての葬儀の機能も果たせるだろう。

夜に告別式を行うのは会葬者にとっても便利である。忙しい人々も1日だけ費やせばよいのだから、現状よりも合理化される。また、最初の2日間は近親者だけの時間であるから、遺族が他者へ目を向けて気を配る必要はなく、死者への弔いに素のままで専心できる。祭壇の設営も2日間は不要であるので、慌ただしさはかなり軽減するはずである。

教理に基づいた本教の葬儀式のあり方について、検討すべき点は多々あると思いますが、まずは、現代社会の実情に即して、葬儀での故人への「弔い」と遺族への「悔やみ」そして、社会への「告知」のバランスを考えた葬祭の日程を考えることから始めればよいのではないかと思う次第です。